

限界にきた一株運動

チツソ
総会

動議戦術また不発

“会社にひとアワ”は幻想

『株主総会』がたびたびチツソと対決した二十九日の第四十四回チツソ株主総会は、一探検隊が、島田社長の入場阻止という戦術をとったため、会場外でのみ合いはあったものの、議会場での混乱はほとんどなく、完全にチツソペースを続けた。今回は前回と違って、本陣の患者連隊からの参加がなく、一株株主だけの集り込みとなったが、『企業責任者』という目的は、またしても果たせなかった。



チツソ株主総会の会場前にすわり込んだ告発する会会員をこぼら抜きする機動隊員（大阪国民会館前で）

船本水俣病を管轄する会（本田 啓吉代表）は、すでに十一月初めから『株主不参加』の方針を打ち出し、患者家庭もチツソ前のすわり込みなども、参加を見送っていた。今回はことし五月の総会のごいも「一株運動は水俣病闘争の本質を見失った安易な『スケジューリング闘争』と批判、五月の乗り込み自体も、患者が出席するので、そのポスターカードの意味もあつてしぼじぶついていた、というのが本意だった。こうした支援団体

内部の足並みの乱れはごまかく、五月に続く今回の『不発』によつて、一株運動の限界がはつきり示されたことは否めない。

この日、告発側は議会場で『自衛隊に当たること』の愚問を取り下げ、患者の要求と対峙の旗を文芸部と一、二百人を緊急動員として提出する方針だったというが、本質的には議会場前で島田社長と『大衆同交』を行なう戦術でいたわけて、株主総会の場での対決というよりも、株主総会の日には株主が来るというような戦術転換を余儀なくされていた。

敵の急所をさか手に取って、被害者が加害者になるのだ」という一株運動は、大資本・巨額のな野蠻体制の前には単なる幻想にすぎなからたことを見せつけられたわ

けで、これで『一株運動』の正即は終わりを告げたという見方が強出している。

鋼管の総会も 混乱なく終了

日本鋼管（前田久生社長）の定時株主総会は二十九日午前十一時から、東京・神田の共立講堂に約

七百四十人の株主を集めて開かれ、約二十分で平穏に終わった。

「川崎の最大の公害発生企業」として日本鋼管の企業責任を追究する「日本鋼管公害反対千人委員会」（前田文弘代表）の公害反対株主約六十人も「ラカード」のぼりを立て会場前でビラまきしたあと総会に出席、責任を追究した。

開会前から会社側は公害反対株主の代表に「右衛門が来ているから挑発に乗るな」と警告、会場入り口を警備員で固めるなど緊張したふん開会だった。会社側は公害反対株主にも一応の発言の機会を与える方針をとり、千人委の前田代表が発言しただけで混乱もなくあっけなく終わった。